

〔現地報告〕

ノマドの末裔たち
～サラワク・プナン社会のフィールドワーク～ (2)

奥野克巳 (桜美林大学国際学部)

*

2ヶ月間続いた短い乾季が終わり、9月になって、ふたたび、雨がひんぱんに降り、周辺の道(ロギングロードなど)が水分を含んで、ぬかるむ雨季を迎えた。7～8月の乾季は、わたしにとって、体調不調の時期でもあった。7月半ば頃からずっと食欲不振が続いて、体調を崩していたが、クチンでおこなわれたBRC(ボルネオ・リサーチ・カウンシル)の会議への参加をはさんで、8月初めになって、三日熱マラリアを発症した。1994年から2年間、ボルネオ島の他地域でおこなったフィールドワークのさいにも、わたしはマラリア熱(とチフスの合併症)に罹ったことがあり、今回のマラリア罹患は2回目であった。

6日間、ビントゥルの病院に入院して治療を受けたが、とりわけ、震えがひどかった。身体を中心のあたりから震えが始まり、それがしだいに、手足の先端にまで届く。自分では、どうしても制御できないのである。震えの後、身体の内側から発熱し、多量に発汗し、やがてぐったりとする。もう二度とマラリアにはなりたくないと思う。

* *

病院の医療スタッフに訊いてみたところ、わたしの調査地(ブラガ川流域)周辺からは、マラリア熱で入院する患者が、ひじょうに多いとのことであった。実際、そこは、わたしが感じるように、<蚊の王国>とも呼ぶのがふさわしい土地である。そこには、ビントゥルから、マラリア対策の公衆衛生班が、ときどき、殺虫スプレーをまきにやって来る。希望者に対して、血液検査をおこなっている。現地の人びとの間では、夜間、眠るときに蚊帳を吊ることが、すでに定着している。

現地のプナン人は、マラリアの流行は、ごくごく最近のこと(1990年代以降)であると、よくいう。それは、ブラガ川の流域周辺のジャングルの木々が商用目的で伐採され、その後、そこに、油ヤシの木が、採集目的で植えられてから以降のことであるという人も多い。油ヤシ・プランテーションの開発が、マラリア感染症を広げさせたのだとすれば、当地のマラリアは、<開発原病>だといえる。

プナン人たち、とりわけ、ノマド生活をしてきたころのプナン人たちは、ジャングルのなかにはほとんど病気はなく、森の外、川の下流域に病気が蔓延しているというイメージを抱いていたという、1960年代の報告がある。現在でも、プナン人は、かつてジャングルのなかで遊動生活をしてきたころには、病気は、歯痛くらいしかなかったのであり、マラ

リア熱や皮膚病などがもたらされたのは、木材伐採がおこなわれ、油ヤシ・プランテーションが建設されたからのことであるといういい方を、よくする。

油ヤシ・プランテーションは、人びとにマラリアなどの（マイナス面の）病気をもたらしたと考えられているとともに、（プラス面で）別の新たなものをもたらしつつある。それは、油ヤシ・プランテーションにおけるイノシシ猟という新たなハンティングである。ブラガ川流域では、2000年代の初めからおこなわれるようになった。

今日、調査地のプナンたちは、ひんぱんに油ヤシ・プランテーションのイノシシ猟に出かける。わたしは、そのような猟に、これまでに10回以上同行している。1990年代に、周辺地域のジャングルの木材伐採後の土地に植えられた油ヤシの実は、すでに十分に熟しているとされる。その甘い実を、夜間に、ジャングルの奥深くから、イノシシが食べにやって来る。人びとは、ブラガ川流域周辺の油ヤシ・プランテーションに自由に出入りすることができる。この地域のプランテーションの管理は、他地域のそれに比べて厳格ではないからである。

プナン人のハンターは、夕暮れが迫るころ、ライフル銃をかついで、大抵の場合、ひとりで、油ヤシ・プランテーションへと入っていく。真新しいイノシシの足跡が残っている場所を探索して、直観的に、イノシシがやって来そうな場所で待機する。多くの場合、油ヤシの木の下に葉を敷いて座り、イノシシがやって来るのを待ち伏せるのである。イノシシは、夕暮れから早い時間にやって来るか、あるいは、深夜に、油ヤシの実を食べに来ると考えられている。

ハンターは、闇のなかに座り、じっと聞き耳を立てる。イノシシがやって来ると、移動する獣がたてるガサガサという音と、鼻を鳴らす音が聞こえる。そのとき、ハンターは静かに立ち上がって、ライフル銃に銃弾を補填してかまえる。懐中電灯で獲物を照らしだして、ちょうどいい距離を見計らって射撃するのだ。

イノシシが近づいて来るとき、わたしは、緊張感とともに、昂揚感を感じる。プナン人のハンターたちも、同じような感覚を持っているのではないかと思う。もちろん、イノシシは、ハンターの予想通りにやって来るとはかぎらない。近くまで来たとしても、プナン人が言うように、風上に立つことになって、風に運ばれて、人の匂いがイノシシにまで届いて、イノシシが恐れて近づいて来ないこともある。

いずれにせよ、油ヤシ・プランテーションでは、近年盛んに、そのようなイノシシ猟がおこなわれるようになってきている。そこに、プナン人のハンティングの進化のかたちを見ることができるだろう。

そのようにイノシシに特化したかたちで、夜中に油ヤシ・プランテーションでおこなわれるイノシシ猟に対して、ジャングルに入って獲物を追う、「古典的な」ハンティングも盛んにおこなわれている。それは、通常、昼間におこなわれる。

そのような狩猟でも、やはり、イノシシがもっとも好まれるが、シカ類、木の上にいるサル類や鳥類などが狙われることも多い。そこでは、鳥をおびき寄せるために、鳥の鳴きまねがなされ、シカ類をおびき寄せるために、草笛が使われる。さまざまな工夫が生かされるのである。このような従来の猟から見ると、イノシシだけに特化した前述の油ヤシ・プランテーションでの猟は、猪肉を大好物とするプナン人にとって、画期的な狩猟法であるということができる。

獲物を獲る確率は、油ヤシ・プランテーションとジャングルのいずれの場合にも、決して高いとはいえない。逆に言えば、プナン人のハンターたちの狩猟の頻度に対して、獲物が取れる確率は低い。それだけに、獲物、とりわけ、イノシシがしとめられて、人びとに分配されるようなときには、人びとの顔と声に明るさが広がる。

体力的に苦しいと感じるときも多くあるけれども、わたしは、プナン人のハンターに同行して、油ヤシ・プランテーションやジャングルのなかのハンティングに出かけるのが好きである。人びとが集うがゆえに、意見が衝突し、妬みや陰口などが囁かれ、金銭問題をはじめとして、さまざまなめごとが生起する定住村（それは、やがて分派行動と移住へと発展していくことになる）。そのような日常から離れて、ハンティングは、自然のなかで全感覚を総動員して、獣たちと向き合うことに終始する。運よく獲物が獲られたならば、そのことは、ハンターたちの心を満たすだけでなく、共同体の多くの人びとの胃袋をも満たすことになる。ハンティングは、食べるために、生きるために欠かすことができない活動であり、現在でも、ノマドの末裔たちのエートスのひとつである。

アブドゥラ政権下のメディア

伊賀 司（神戸大学大学院博士課程）

2003年10月31日にマハティール首相が退任し、翌11月1日にアブドゥラ政権が成立してほぼ3年が経とうとしている。前政権から引き継いだ2020年までにマレーシアを先進国入りさせるという「ワワサン2020」の目標の下で、イスラム・ハドハリ（文明的イスラム）や農業の重視、汚職の根絶などを掲げたアブドゥラ政権は、就任後間もない2004